女神の末裔

第三章

夜が更けた。

土蜘蛛の邑は闇に覆われた。ただ、マユワとサヤ母娘の住む大穴にのみ、獣油の燈火がかすかに瞬いていた。

「吾も全てを知るわけではない」

首から足元まですらりと伸びた鮮やかな白絹で豊満な肉体をくるむように纏ったマユワは、アダヒメと阿礼を交互に見比べた。

「吾等の邑には史人はおらぬ。一族の長であるマユワとサヤが代々、口伝えに伝えてきた。吾が祖が土蜘蛛の長となったのは百年前。それより古い事柄は口伝えにはない」

「百年前……」

阿礼は呟いた。

「ヤマトの史に記す、ヤマトの地に日輪の女神の末裔が降臨し、四方を平らげてクニを開いたのが百年前」

マユワは頷いた。

「百年前、土蜘蛛を束ねていたアユメ（鮎女）の一族が絶え、それより前の口伝えも絶えた」

娘のサヤが、酒を入れた高杯を運んできた。マユワは高杯から碗に酒を注ぎ、唇を濡ら

し、しばらく俯いていたが、ふと顔をあげた。
「ヤマトの大王家には三種の神器があろう」
神剣、神璽、神鏡。日輪の女神より賜ったという三種の神器こそは、日輪の女神の末裔としての大王家の権威を保障するものとされていた。
「見たことがあるか」
アダヒメは首を振った。三種の神器は、王宮の内蔵の奥深くにしまわれ、大王即位の儀式のとき以外は匣に入れられ厳重に封印されている。マユワは阿礼を見た。
「ヤマトの史人よ。史人ならば神器の形くらいは知っているであろう」
阿礼は頷いた。
「まず、神剣の形を述べよ」
「刃が三尺、柄が一尺と聞いた」
「それのみか」
阿礼は首を傾げた。
「刃の形は如何か」
阿礼は答えられなかった。
「ヤマトの史人すら知らぬ」
マユワは脂の乗り切った豊満な体を揺すって笑った。
「それこそ、ヤマトの大王家の蔵に収めた神剣が偽りの神剣であることの証。まことの

神剣は七枝の剣」
「七枝の剣」
「然り。刃に六つの枝が生えいてる宝剣。ヤマトの大王家の鍛冶どもがその形状を真似て偽物を造ろうとしてなしえるものではない。即ち偽物の剣を持って神剣と称しているだけのこと」
「まことの神剣はいずくにある」
「国栖」
アダヒメの眼が光った。阿礼は、やはり、と呟いた。
「故に国栖は大王家にはまつろわぬ。国栖が神剣を持っているかぎり、大王家が日輪の女神の末裔ではないことの証となるからだ」
マユワは碗の酒をあおり、語りはじめた。

百年前、ヤマトを統べていた日輪の女神の末裔である王は、その名をナガスネヒコ（長髄彦）といった。その名のとおり背が長大で手脚が長い。慈悲深い君主であったと伝えられている。
西の方よりミマキと名乗る男を中心とした百人の集団が現れたのは収穫の祭りが行われている最中であった。まれびとをもてなすのはヤマトの習いである。ナガスネヒコは王宮にミマキたちを招き、酒を振る舞って歓待した。ミマキは篤く礼を述べ、臣従を誓い、西

より持ち来たった水晶や翡翠を献上して去った。ミマキたちは平群の山の向こう、河内と呼ばれる湿地に住み着き、水を治めて田畑を拓き、邑を開いた。収穫した米をナガスネヒコに献上し、礼を尽くした。

ミマキを最初に疑ったのは、王宮を守る土蜘蛛の長アユメであった。ミマキが鍛冶を招いてさかんに矛や剣を造らしめ、武備を蓄えていることがアユメの耳に伝わってきた。王宮を守る国栖の男軍はアユメの懸念を嘲笑った。ナガスネヒコは国栖を信じた。

ある時、ミマキはナガスネヒコの王宮を訪れ、ナガスネヒコの王の楯となるべき男軍を作りたい、土蜘蛛の女兵を数人遣して若い健児に剣技や戦を教えてほしい、と願い出た。ナガスネヒコは快諾した。

三年の間、ナガスネヒコは土蜘蛛の女兵を数名ずつミマキの邑へ遣した。三年目の夏、ミマキの兵どもが土蜘蛛の女兵を一人、姦して殺した。ミマキの兵と土蜘蛛たちが戦い、多くが傷つき殺された。

戦端が開かれた。ミマキの男軍は三百に膨れ上がっていた。ミマキは三年の間、密かに近隣のクニや邑と合衡し、盟を結んでナガスネヒコを滅ぼす謀を練っていたのだ。ミマキの軍は土蜘蛛たちの屍を幟の頂に掲げ、平群の山を越えて進撃した。

ナガスネヒコ王の軍は、土蜘蛛の女軍と国栖の男軍とを合わせて二百だった。三日にわたる激戦の後、ミマキは敗れ、平群の山を越えて逃げた。ナガスネヒコは軍を河内へ進めた。ミマキは降伏した。邑の入口に武器を積み上げ、地面に額をすりつけて助命を請うた。ナガスネヒコはミマキを許した。

その夜、ミマキは宴を開いた。邑に蓄えた酒や食糧をすべて供出した。ナガスネヒコ以下二百の軍は快く歓待を受けた。酒には毒が盛られていた。意識を失い軍兵二百は地に伏して泥のように眠った。ミマキの合図とともに隠れていた兵たちは次々とナガスネヒコの兵を殺戮した。

ミマキは夜明けとともに再び軍を出発させ平群の山を越えた。王とほとんどの兵を全てうしなったヤマトの地はミマキの軍に蹂躙された……。

「土蜘蛛の女兵の多くは河内の邑で全滅した。残った老女や女童たちも押し寄せたミマキの軍に殺戮された。三種の神器のうち、神璽、神鏡はその折りに奪われた。僅かに十人に満たぬ国栖の男軍は神剣をもって逃げた。十に満たぬ土蜘蛛の生き残りは、この地に住み着いた。それが吾が祖マユワ」

マユワは溜め息をつき、碗の酒を一気に飲み干した。

「百年の間、この山奥に籠もり、外との交わりを断ち、ひたすら子を産み育て、その数は今や三百。吾等よりさらに南へ逃げた国栖の者どもも数を殖やしていよう。国栖と盟を結び、大王家を滅ぼしてヤマトを奪い返す時が近づいている。そう考えていたところに、大王に疎んじられヤマトを追われた剛勇の皇女が現れた」

マユワは覗き込むようにアダヒメを見た。

「国栖の地までは幾つもの険しい山々を越えねばならぬ。それでも汝等は行くか」
「行く」
「国栖が汝等を信じるかどうか分からぬぞ」
「行く」
アダヒメの眼が暗く光っていた。
「ならば……」
マユワは娘を一瞥した。
「サヤを共に行かせる。吾が娘が共に行くならば、国栖も汝等を信ずるであろう」

廟堂の奥の神殿に、炉が設けられ、火が焚かれた。
払暁にはまだ早い。闇のなかで蛇の舌のようにうねりながら炎が燃え上がり、三人の顔を照らし出した。火のすぐ傍らに、白い麻の装束で鹿の骨を手にした呪人が座っていた。その後方に、ヤマトの大王と、大臣・建内宿祢の姿があった。
建内宿祢は八十歳。彼の父親はミマキの大王とともにヤマト平定に功績があった。建内宿祢が初めて廟堂に連なった一月後、ミマキの大王は病死した。
大王家の太祖であるミマキの大王の面影をただ一人覚えている建内宿祢は、並いる豪族のなかでも別格に扱われていた。
呪人が、鹿の骨を炎にかざした。骨の表面がちりちりと音をたてて焦げ、わずかに髄に残っていた脂が浮き出した。やがて炎の熱は、呪人の額に雨だれのような汗を浮かべさせた。

突然、ぴしりと静寂を破って鹿の骨は真二つに裂けた。
「あ」
呪人は小さく叫び、鹿の骨を投げ出した。裂け目から煙がさかんに噴き出し、悪臭が神殿の内にたちこめた。
「これは……」
呪人は青ざめた。鹿の骨を焼いて卦を占うのは毎朝の儀式である。その吉凶で、神意を問い、政事を行う。だが、骨が真二つに裂けたのは、初めてだった。
「何の卦ぞ」
大王は低く、詰め寄るように呪人に問うた。
呪人は、じっと二つにきれいに裂けた骨を見つめていたが、静かに首を振った。
「かような卦に何の神意のあるか、吾等が口伝えにはない。ただ、吉兆であれ、禍々しき兆しであれ、大いなる変事の近いことが察せられるのみ」
大王は重ねて問おうとして口を噤んだ。呪人はゆっくりと鹿骨を拾い、麻袋に収め、神殿を出た。大王に卦を伝えれば、すぐに立ち去るのが習いである。大王と建内宿祢、二人がこの卦によりいかなる政事を行うかは、呪人の携わるところではない。
「建内宿祢よ」

大王は、腰の曲がり、禿頭に白髭の老人に問うた。
「かの卦は……高市の津の兵を殺戮し、イリビコの皇子をさらって消えた、アダヒメのことを言うと見たが、如何か」
建内宿祢は、しばし染みの目立つ禿頭を傾け、重い瞼を閉じていたが、やがてうっすらと瞼を開けた。
「アダヒメが水路ではなく、山づたいに国栖へ向かったとすれば、大王家にまつろわぬ者どもの助けなくば、辿りつけるはずもなし」
「では、アダヒメはかの者どもと盟を結んだか」
「恐らくは」
大王は眉を顰め、髭を撫でた。落ちつかず、捕らえられた獣のように意味もなく歩き回った。建内宿祢は黙して語らない。大王は叫んだ。
「軍を起こす」
建内宿祢は僅かに眉を顰めた。上気した大王をじっと見つめた。
「川を越えてまつろわぬ者どもを一気に平らげよう」
「下策である」
建内宿祢は嗄れ声でぴしりと大王の焦燥を断ち切るように言った。
「アダヒメはただ一人、剣も持たず、久米、大伴、佐伯の兵長および七人の兵を殺戮した。兵どもは、アダヒメの名を耳にしただけで腰は砕け、正気を失う。たとえ何百の兵を差し

向けても、未踏の地にて大敗するのみ」
「では……」
大王はせきたてるように言った。
「如何する」
「そもそも、敵はアダヒメ一人」
「一人？」
「土蜘蛛、国栖の輩を敵とすれば勝てぬ。しかし、二三の者をかの地に潜ませ、アダヒメ一人を誅するとならば、はるかに易しい」
南のまつろわぬ民を平らげるには、クニを富ませ、北や東に版図を広げ、大軍を養い、武備を増やさねばならない。それにはあと十年はかかる。今はまつろわぬ民との衝突は避けたい、と建内宿祢は説いた。
「然れどもアダヒメは生かしてはおけない。大王がそう希うならば、吾が策より他になし」
大王は頷いた。
二人は神殿を出て廟堂へ向かった。使部が駆けてきた。
「大王よ」
使部は息を整えつつ膝をついて報告した。
「オウス（小碓）の皇子が帰ってきた」

オウスの皇子は十七歳。アダヒメに殺された日継ぎの皇子オオウスの同母弟である。

女童のように優しげな……と人々は言った。白い貌だちだけではない。ほっそりとした手足、小さな尻。だが萱で削いだような白眼がちの眼が冷酷な性情を窺わせた。

ヤマトの大王家は謀を得意とした。他のクニを奪うときは、まず刺客を遣わして王を暗殺し乱れに乗じて内通者を作り、しかる後に兵を進めて乗っ取る。

オウスの皇子は、刺客として東に赴き二つのクニの王を討った。一人の王は、女童に化けて酒宴に紛れ込み、寝屋に招じ入れられたところを刺殺した。もう一人の王とは友となった。二人で川に遊んだ。オウスの皇子は先に川からあがり「刀合わせをしよう」と持ちかけた。相手の剣は木剣にすり替えられていた。オウスの一撃で倒した。

「オウスの皇子よ」

大王は廟堂に現れたオウスの皇子の肩を抱いた。居並ぶ豪族たちは手を打って武勲を讃えた。オウスは大王の大仰な仕草を無表情に受け止めていた。大王はオウスの耳元で囁いた。

「帰還したばかりではあるが、もう一度、旅立て」

オウスの皇子は唇の端を僅かに歪め、囁き返した。

「次なる敵は、南にいる」

「南のいずれのクニか」

「クニの王ではない。汝の異母妹である」

「異母妹」

「然り。アダヒメ」

太陽がしらじらと東の山嶺より昇った。

「皇子」

廟堂よりほど近き沼の辺の叢に寝転んでいたタケヒコ（建日子）が、オウスの皇子の姿にむくりと起き上がった。

「タケヒコ、今度は南へ行く」

オウスは、タケヒコの傍らに腰をおろした。肩幅が広く、袖から毛深く太い腕が覗く大男のタケヒコの膝に皇子の掌が伸びた。

「女を殺す」

「女」

「アダヒメ」

オウスの言葉に、タケヒコは僅かに眉を顰めた。

「女を殺すのは気が進まぬか」

オウスは薄く微笑んだ。

「アダヒメは高市の津の兵を殺し、南の山奥に入った」

オウスはタケヒコの股間に触れた。

「吾と汝は南の山に入り、アダヒメを探し、殺す」
タケヒコの男根が力強く精の捌け口を求めて屹立した。オウスはタケヒコの足のつけ根に顔を埋めた。
タケヒコは眼を閉じ深く息をついた。ヤマトより西、吉備のクニの王の甥だったタケヒコの前にオウスの皇子が現れたのは三年前だった。ヤマトの皇子とは知らず、タケヒコはオウスを姦した。オウスの美しさと手管にタケヒコは溺れた。オウスの願うまま叔父の吉備の王を殺した。
吉備を出奔したタケヒコは、以後、オウスの従者としてさまざまなクニをめぐった。彼らの不吉な影の赴くところ、王は命を奪われ、クニは乱れて互いに血を流し、やがてヤマトの大王家の版図となる運命を辿った。彼らには稗田の史人は随行しなかった。彼らの謀は史には記されるべきではなかった。
オウスは顔をあげ、タケヒコの巨大な睾丸を掌で弄びながら言った。
「アダヒメは津の兵を素手で殺したというぞ」
「素手で」
タケヒコの瞼がかすかに開いた。
「そう」
オウスの皇子は喉の奥を鳴らし、声を殺して笑った。
「ふぐり玉を潰して殺したらしい」

「稗田の宿祢よ」
大王家の史人を束ねる稗田家の長老は、血の匂いがする、と思った。目の前に、オウスの皇子の端正な白い貌があった。血の匂いは透き通った皮膚の下から発しているようであった。
「南の国栖へ至る間に、如何なるクニや邑があるか」
「皇子は国栖へ行くか」
「汝は問うな。ただ答えよ」
宿祢は首を振った。オウスは嘲った。
「稗田の蔵の竹簡にも記してはいないか」
稗田宿祢は口を噤んだまま黙っていた。オウスは言った
「アダヒメが来る前に高市の津を襲った女兵がいたと聞いた」
稗田宿祢は答えなかった。オウスは重ねて問うた。
「土蜘蛛か」
稗田宿祢の眉が僅かに動いたのをオウスは見逃さなかった。
「まずは土蜘蛛を探す」
稗田の邸を出たオウスの皇子は、タケヒコに言った。

「土蜘蛛は滅んではいなかった。稗田の翁は何も言わなかったが、対岸に潜んで高市の津の兵を殺戮したは土蜘蛛だ。土蜘蛛がアダヒメの行方を知っている」

風が吹き、道端の葦を揺らした。葦の向こう側は小川だった。小川は高市の津へと続く。

「タケヒコ、汝は女とまぐわったことはあるか」

オウスの問いにタケヒコは不機嫌に首を振った。

「女から物を聞き出すには、まぐわえばよい」

タケヒコは答えなかった。

ふと、葦の原を越えて、小川の川辺から軽やかな嬌声が響いてきた。みると、白い巾を肩にかけて垂らした宮女が三人、川の水に足をひたしていた。

「オキナガヒメ」

オウスが立ち止まって呟いた。一際目立つ美貌は、大王の皇后オキナガヒメ（息長媛）であった。オウスの皇子より二歳上。オオウスとオウスの母親である先の皇后の崩御の後、三人の妃より抜擢されて皇后の地位に就いた。ほかの二人は妃はすでに四十を越えていた。二十に満たぬオキナガヒメが皇后に選ばれたのは、美貌もさることながら、王宮の重鎮・建内宿祢の曾孫であるのが一の理由であった。

黒々とした大きな瞳、削いだようにくっきりとした目鼻だち。気品と威厳を備えた皇后が裸身になると大きな乳房にくびれた腰を閃かせ、野育ちの娘のように大胆に振る舞うことを、オウスは知っていた。

オウスは十二歳のとき、オキナガヒメに誘われて建内の宅の蔵に忍び込んだ。オウスはオキナガヒメの口のなかで初めて精を漏らした。その翌日、オキナガヒメは妃として王宮に入った。

オウスはオキナガヒメから与えられた快楽を忘れられなかった。ある夜更け、オキナガヒメの寝屋に忍んだ。眼を閉じたままの妃の体を撫でていたオウスが我を忘れて己が男根をつかんだとき、オキナガヒメは不意に起き上がり、オウスを押し倒し、姦した。オウスが三度目に精を漏らし、精根尽き果てて仰向けに伏せ、荒い息を整えていると、突然、睾丸をつかまれた。オキナガヒメは五本の指を両の睾丸に絡ませ、強く捩じりあげた。悲鳴をあげたが、オキナガヒメは離さなかった。王宮の兵が駆けつけたときには、オキナガヒメは衣服を整え、全裸のオウスの睾丸を掴んで抑えつけていた。

オウスは放逐された。山中を彷徨い、山人に姦された。オウスは毎夜、山人とまぐわい食を得た。十四歳のとき、山人を殺し西へ逃れた。一年の放浪の後、吉備にたどり着き、タケヒコに姦された。吉備の王の首を手土産にヤマトに帰還し、罪を許された。だが、大王はオウスがヤマトに留まることを恐れ、次々と他のクニの王の謀殺を命じた。

オウスの刺客としての運命を定めたのが、オキナガヒメだった。

「誰」

葦の原が踏み折られる音に、三人の宮女たちは振り向いた。

「オウスの皇子」

オキナガヒメは身震いのするような艶(あで)やかな微笑を浮かべた。
「皇后よ」
オウスは皇后に歩み寄った。
「吾はこれより、土蜘蛛の邑へと行く」
皇后は瞬きもせずオウスを見つめた。
「女とのまぐわいを忘れた」

川原の叢(くさむら)が揺れ、男と女の荒い息づかいが風に乗って漏れてきた。
やや離れた川原の石の上に、タケヒコがきつく膝をつかんで座っていた。二人の宮女は叢にもタケヒコにも背を向けて佇んでいる。
「汝の伴の兵は……」
仰向けに地面に身を横たえた皇后は、オウスの皇子を見上げて囁いた。
「タケヒコのことか」
「汝の寵童なるか」
オウスの皇子は黙して答えなかった。右手は、オキナガヒメのはだけた胸に置かれていた。やわらかく大きな乳房を揉み、やがて滑らかな腹を伝わり、陰(ほと)をまさぐった。
皇后は眼を閉じ、かすかに吐息をもらし、それから喉を鳴らして笑った。
「女では勃(た)たぬか」

皇后の手がオウスの皇子の股間に伸びていた。白い男根は、柔らかく垂れ下がったままであった。だが、皇后の指が皇子の肛門をまさぐったとき、皇子は鋭い快感に体を震わせた。
続いて激痛が走った。皇子は呻いた。皇后の指が皇子の陰嚢にからみつき、なかに収まった睾丸に爪を立てるように圧迫していた。
皇子の男根が急激に怒張を始めた。
皇后は皇子の耳元に息を軽く吐きかけながら言った。
「汝の父、大王もこれが好きであった」
皇子は激痛を堪えるように眼を閉じ、歯を食いしばって耐えていたが、オオキミ、の語を聞いて、眼を見開いた。皇后は視線をそらし、嘲笑(あざわら)うように言った。
「あまりにふぐり玉を痛めつけすぎて、もはや役に立たぬ」
皇子は皇后の手を振り払った。二つの手が彼女の喉に伸びた。
「父大王を悪しざまに言うな」
眼が据わっていた。皇后は笑みを消さずに言った。
「五年前、その大王の寵妃の寝屋に忍んできたのは誰か」
再び、皇后の手が皇子の睾丸に伸びた。皇子の男根は今にも弾け飛びそうに張り切っていた。皇子は皇后の双の丘のように盛り上がった乳房に顔を伏せた。

西の山の端に陽が沈みかけていた。
「三度、精を漏らした」
皇后が言うと、互いの顔に紅の染料を塗っていた二人の宮女は鳥の囀るように笑った。
宮女の一人、ヤスメ（八須女）が問うた。
「あれだけの間にか」
「そう」
皇后は、オウスの皇子とタケヒコが立ち去った方に視線をやりながら言った。
「では、体が満たされまい」
もう一人の宮女、イサメ（五狭女）が笑った。皇后は艶然と微笑んだ。
「満たされぬ」
皇后は白絹の上衣を脱いだ。宮女が、紅の貫頭衣を着せ、もう一人の宮女が傍らの匣から革の胸当てを取り出し、皇后に着せた。
皇后は立ち上がった。彼女の白い貌は紅の染料で隈取られていた。膝までの貫頭衣の紅の裾からしなやかな脚が伸びていた。腰に剣を履き、髪の毛を頭頂で束ねて垂らしている。二人の宮女も、同じいでたちであった。
「行こう」

平群の峠を越えれば河内である。峠の道は細く、山の樹木に囲まれていた。

その峠道を、筋骨逞しい髭面の男たちが三人、縄で数珠繋ぎにされて歩いていた。その前後を矛を構えた兵が二人で固めている。
三人は、王宮を守る久米部の兵であったが、酒に酔って宮女に戯れたとして、笞打たれ刺青を施された上で追放となった。護送の兵たちの役目は、平群の山中で日が暮れたところで四人の腕と脚の筋を切り、置き去りにすることであった。歩けぬまま山犬のうろつく山中で一夜をすら生き延びることは難しい。
「そろそろ、陽が落ちるな」
前を歩いていた護送の兵は後ろを振り返り、嘲るように言った。
「明日は黄泉路だ」
「吾等は罪はない」
一人の罪人が怒鳴った。
「そもそも吾等に酒を勧めたのは、吾等が戯れたという宮女たち。眼が覚めたときには捕らえられ、縄を打たれていた。身に覚えのないことだ」
「然り」
背後から女の声がした。五人の男たちは振り返った。
女が三人立っていた。革の胸当てに覆われた豊かな乳房。紅の衣の裾から伸びる脚。腰に剣を帯びていた。真ん中の女は続けた。
「その男たちは薬の入った酒を飲まされ、哀れにも罪を被せられた」

女は後ろを固めていた護送の兵に近づき、いきなり剣を抜いて振り下ろした。護送の兵がつかんでいた三人の罪人を繋いだ縄が断ち切られた。

「何をする」

護送の兵が剣を抜こうとして呻いた。女の膝が股間に食い込んでいた。女はいったん膝をおろしたが、兵が両手で股間を抑えようとする寸前に、再び打ち込まれた。兵の体が宙に浮いた。

兵の体がどさりと地に叩きつけられた。白眼を剥き、細かく痙攣している。息をすることもできず、口がだらしなく開いていた。女は兵の両足首をつかんで仰向けにひっくり返し、大きく股を開いて打ち込んだ。兵の体が弓のように湾曲してのけ反った。

前方にいた兵の視線に、もう一人の女が剣を構えて駆けてくるのが映った。兵は剣を抜いて受け止めた。だが、それと同時に、女の爪先が兵の股間を蹴りあげた。誤またずに睾丸を打った。兵は激痛に硬直した。次の瞬間、その背後に回った別の女が、同じ箇所を蹴っていた。続けさまに今度は、二人の足が同時に兵の股間を蹴り上げた。二つの爪先に打たれ、兵の睾丸は二つながら砕けた。

三人の罪人たちは呆然と立ちすくんでいた。護送の兵は二人とも、血反吐をはき、股間を赤く染めて瀕死の態であった。三人の女たちが剣を抜いて近寄ってきた。三人の罪人は身震いし、息を飲んで見つめていた。

女たちは罪人たちの縛めを切り、剣を彼等の足元に投げ出した。

「剣を拾え」

女の一人が命じた。罪人たちは恐る恐る剣を拾った。女は続けた。

「剣をとって吾等と戦え。一人でも倒すことが出来れば、罪を免じる」

「汝は……」

罪人の一人が、女を指さして呻いた。

「悟ったか」

女は笑った。

「この二人は汝等に酒を勧めた宮女。汝等が屈強の兵と聞き、吾等の腕を試すための謀。王宮にあっては、人の眼もあり、武を鍛える場もない。戦え。あるいは命は助かるであろう」

「如何した」

怒りと困惑に立ち尽くす三人の罪人に向かって、右側の女が嘲るように言った。

「久米部の兵ともあろうものが、素手の女に勝てぬか」

一人の罪人が、剣の柄に手をかけた。

「さすが久米の子よ」

オキナガヒメが微笑んだ。

三人の罪人は憑かれたように剣を抜き、女たちに飛び掛かった。

頬のふっくらとして、よく動く眼をしたヤスメは、岩のごとく頑丈な罪人と対峙した。
罪人は剣を右手に高く構え、腰を落とし、油断なくじりじりと間合いを詰めた。ヤスメの背後は崖であった。いつの間にか、ヤスメは追い詰められていた。罪人の唇が醜く歪んだ。
罪人の剣が一閃した。横薙ぎにヤスメの首筋をかすめた。ヤスメは身を屈めて剣を避け、罪人の懐に飛び込み、膝を折り曲げて、突き上げた。
罪人は瞬時に膝を閉じた。相手の女が股間を狙って来ることは予想していた。だが、罪人の予想は、ヤスメもまた予想していた。ヤスメの右の人差し指と中指が、罪人の両眼を突いた。
「ぐあぁっ！」
罪人は咆哮した。両眼が血を吹き出した。すかさず、ヤスメの脚がはねあげられた。爪先が正確に睾丸を打った。罪人は両手で股間を抑え、左右に首を降りながらうずくまった。眼から吹き出す血が、左右の地面を濡らした。
ヤスメは罪人の顎を蹴った。罪人は仰向けに倒れた。その股間を踏みつけた。罪人は野獣のごとく咆哮しながら、ヤスメの足首をつかんで悶絶した。ヤスメはあざ笑いながら、睾丸を踏み潰した。

二重瞼の眠たげなイサメは、小柄な罪人が次々と繰り出す剣を舞うように避けながら、笑い続けた。

「そう手が短くては届くまい」
罪人は顔を赤く火照らせ、息をもつがず攻撃を続けた。だが、切っ先は敏捷なイサメの衣をも掠ることすら出来なかった。ついに罪人は息を切らしてよろけた。あやうく剣を地に突き立てて転倒を免れたが、その瞬間をイサメは逃さなかった。
イサメは罪人の太股を蹴った。罪人は悲鳴をあげて膝をついた。続けざまにみぞおちを蹴られた。罪人は身を折って呻いた。イサメは罪人の首に右腕を回して締め上げた。罪人はもがいた。両手の爪をイサメの腕にたてた。
「うっ」
イサメは舌打ちし、背後から左手で罪人の睾丸をつかんだ。
罪人は絶叫し、のけぞった。イサメは容赦なく睾丸をひねりあげた。罪人は身を捩り、情けを乞うた。
「では選べ」
イサメは笑って、涙を滝のように流して苦しむ罪人の耳元で怒鳴った。
「蹴り潰されるがよいか。握り潰されるがよいか。握り潰すには刻がかかる。汝の苦しみもまた長く続く。蹴り潰されるならば瞬きする間にすむ。蹴り潰されるがよいか」
言いながら握った左手に力をこめた。罪人は首を振って悶えた。
「握り潰されるがよいか」
左右の睾丸が握り潰されるまでの間、罪人は全身を火で焼かれるような苦しみに苛まれ

た。

「皇后よ」

二人の仲間が宮女たちに睾丸を潰され地に這うのを見た罪人は、剣を捨てて平伏した。

オキナガヒメは失望したように罪人を見下ろした。

「皇后よ。許せ。すぐに吾の首を斬れ」

罪人はわめき、剣をオキナガヒメの足元に投げた。二人の罪人と護送の兵たちは、残酷な女たちによって、死ぬことも叶わず、地獄の業火に焼かれながら、悶えつづけていた。死ぬならば、一瞬で殺されたい。追い詰められた哀れな罪人の最後の願いであった。

だが、皇后は彼の願いを叶えてやるほどの慈悲は持ち合わせてはいなかった。

「ヤスメ、イサメ。彼を立たせて、支えよ」

二人の宮女は罪人の腕を抱えて立たせ、左右からはがい締めにして無理やり股を開かせた。

皇后は、涙に濡れてなおも慈悲を乞う罪人の前に立ち、彼の顎を撫で、それから、全身の力を込めて足を蹴りあげた。爪先が罪人の股間を打った。罪人は悲鳴をあげた。続けて三度、爪先が罪人の睾丸を無慈悲に打った。罪人は身を捩り、悶えた。皇后は罪人の両肩を抑え、膝を三度、打ち込んだ。罪人は白眼を剥き、意識を失った。

「まだ、潰れぬか」

皇后は罪人の陰嚢を握った。罪人の体が大きく痙攣した。

「ただ、潰すには惜しい」

皇后は宮女たちに命じて罪人を仰向けに寝かせ、股間をはだけた。陰嚢が、橘の実のように膨れていた。皇后は、傍らの木の枝を折り、剣で削いで長い木串を二本作った。

木串を罪人の腫れあがった睾丸にあてがい、ぎゅっと突き刺した。木串が睾丸を貫いた。罪人は大きく絶叫し、血反吐を噴き上げた。

二日後。

高市の津の南岸。崖の上の森で、オウスの皇子とタケヒコが、股間を両手で抑えてうずくまっていた。彼らの周囲を、剣を抜いた数人の土蜘蛛の女たちが取り囲んでいた。

「吾はヤマトの皇子」

オウスの皇子が額から冷や汗を流しながら、顔をあげて笑みを作った。

「アダヒメを探している。汝等の邑（むら）へ連れてゆき、土蜘蛛の長（おさ）に会いたい」

「汝がヤマトの皇子か」

後ろ手に縄を打たれ、広場に引き据えられたオウスの皇子とタケヒコの前に現れたマユワは、不思議そうな顔で問うた。

「ヤマトの皇子が、兵も史人（ふひと）も連れず、何しに来た」

「アダヒメに会いたい」
オウスの皇子は眦を決して叫んだ。
「アダヒメは大王に疎まれ、大王の命を受けて一人で国栖を討ちに行った。アダヒメは死ぬ。アダヒメの死を大王は望んでいる。死ぬ前に会いたい」
「会うて如何する」
「まぐわいたい」
マユワは大声で笑った。
「まぐわう前に殺されるぞ」
「アダヒメにならば、殺されたい」
「さほどにアダヒメを愛づるか」
オウスの皇子は頷き、額を地にすりつけた。
「アダヒメに会わせよ」
「アダヒメはここを去って国栖へ向かった」
オウスの皇子は顔をあげた。
「アダヒメは殺されぬ。吾が娘もともに行った。アダヒメは国栖を討たぬ」
「何故」
「アダヒメは国栖を討ちに行ったのではない。ヤマトの大王家がまことに日輪の女神の末裔か否かを確かめに行った」

その夜。
穴の入口から月の光が差し込み、オウスの皇子の白い肌を闇に浮かびあがらせた。女童のような貌を、豊満なマユワが覆いかぶさるように覗き込んでいた。
「美ましヤマトの皇子よ」
マユワは微笑んだ。彼女の右手が皇子の男根を握りしめていた。
「たいていの男は、ふぐり玉を痛めつけられれば、泣き転び、悶え苦しむ。しかし汝はかように精を漲らせている」
マユワはオウスの男根に陰をあてがい、腰を沈めた。
「心地よいか」
オウスの皇子は眼を閉じたまま、わずかに頷いた。マユワの大柄な体が上下に揺れた。やがて吐息が漏れ、咽ぶような啜り泣きに変わった。
命を助ける代わりに胤を差し出せと、と彼女は広場で告げた。今頃タケヒコは別の穴で三人の土蜘蛛の娘に無理やりにまぐわされているはずだった。タケヒコにとって殺される以上の苦痛であろう。
オウスの眼の上で瓜のような二つの乳房が激しく動いた。土蜘蛛の長は我を忘れ、快楽を貪っていた。オウスは両手を縛られたままだった。その腕が小刻みに動いた。
「痛っ！」

マユワが小さく叫び、動きをとめた。眼を見開いた。オウスの右手がマユワの耳元にあてがわれていた。

「動けば汝は死ぬ」

マユワの耳たぶから血が滴(したた)り、オウスの白い胸に垂れた。彼女の頸動脈に小さな金属が押し当てられていた。細長い鉄の串のようなものであったが、先端は平たく鋭利な刃になっている。

「どこに隠していた」

マユワは息を整えながら問うた。オウスは浅く笑い、左右の顔の脇に束ねた髪を撫でた。

「髻(みづら)に」

「何を望む」

マユワは忌(い)ま忌ましげに舌打ちし、灯影に照らし出されたオウスの白い貌を凝視した。